

借金の重圧が非常に強く農民におしかぶさつて来た。食糧はもとより、中農までが、これから生産のため借金をすると小事は思ひもよりぬこと、なつた。

農民の動き

小作料も税金も飯米も、すべてが長い間に亘つて借金となつて来てゐるのだが、今の社会制度の下では、借金を全然返へさぬと云ふわけにはゆかない。食糧は労力力を喰ひかがりつゝ、それによつて僅かながらも借金を返へしてゐるので、この労力力を喰ひかがれる間は地主の土地取上げ何よりも怖れると云ふのが存るのであらう。しかし地主攻撃に対して防衛的な態度をとつてゐる反面では、それだけ飯米欠乏に苦しめられる。金を欲しい、米が欲しい、この要求はやはり小作料と土地耕作に於いて、次第的ながら打ち破り進んで行くであらうが、今ではその守勢の故に地主に対すると同時に政府に向つられてゐる。故農土木と、政府米に対する食糧の要求と動きがそれだ、食糧の動きは、それ自体がすでに今日では政治的である。

中農がマニラの暴落から受けた苦痛は、打撃が急激であつたが、本質的には食糧の苦痛よりは弱いのであるが、感じの上では非常に強かつた。農村の中堅分子として支配階級から扱はれてゐるこの層は政府に対して食糧ほど希望を失つてゐない。彼等は政府に向つて救済を要求する。かくて、中農の動きも自立つて政治的になつて来たのである。

食糧の動きが政治的であると共々農村に於ける階級対立——地主に対する経済斗争を不断に斗つてゐる

るに及して、中農の動きは、農村全体として都市に対抗し、農村に於ける階級対立を消してゆく傾向のあることはいふまでもない。食糧団体である全農と中農団体である農村フアツシヨとの動きの本質的差異がそこにある。

長い間に無修にも打ちのめされて来た食糧は、反発力も失つてゐるといはれる。一面ではどうも文へるが、しかしさつかけさへあれば、鼓動する気配が見えてゐる事も事実である。静岡、熊本の水騒動を見てもこれはわかる。彼等はまた中農と共に貧乏の打開を待つとより早くやらうとする。そこで儲かる話なり、集金などにもとんど集まるが、増えどう仕末するかといふような場合には集つて来ない傾向がある。それだけ政府の経済更生運動なるものに、いつかいつていかに自らに危険があるわけか、この気持は、経営上の具体的指導の意見をもつて大衆と親しむと導く必要があるであらう。

地主攻撃

九年度上半期小作争訟件数は二五九四件にして、昨年同期に比し三八七件の増であるが、うち一七九八件は土地取上げである。更に地価は田三九八円で前年度に比し十一円増、畑二四〇円で六円増、それ以外も増、また実収小作料も田一石四升を三升止り、畑十一円二〇割を八割高くなつた。そしてまた協同組合が増加の傾向にある。これ等の事實はさかさまでもなく、地主攻撃を端的に示してゐる。

何れ地主攻撃をなすか？ 自作化、売買土地移動、土地買逃等、中小地主の没落もその一因で